

## オスマーン・ブン・アッファーンの後継

(P.175 下から4行目より) 彼(アルムサウワル・ブン・ムハッラマ) 言った。「つまり成立したことは何であつたのか？」彼(アブドルラハマーン) はオスマーンの手を取り、それから彼は彼(オスマーン) に言った。「貴方は神への誓約と契約が必要である。何故なら、神の書と彼の使徒のスナ(奨励行為)と貴方の教友達のスナを貴方が我々の為に行うが故に、私は貴方に誓いを立てたのである。そしてオマルはウマイヤ家の誰も人々を監視する地位に就けてはならない、と条件を付けたのではなかつたか？」

するとオスマーンは言った。「その通りである」。それから彼(アブドルラハマーン) は、アリー・ブン・アビー・ターリブの手を取り、それから彼は彼(アリー) に言った。「私は貴方にオマルの条件に則り誓うであろう。(P.176)それは貴方がハーシム家の誰も人々の監視役にさせないと言うことである」。

するとアリーはその時言った。「この事についての貴方の係りはどういうものだ(何故介入してくるのだ)。もし私が、自分の首に掛けて、それ(誓い)を結ぶのであれば、私はムハンマドの共同体に対して努力しなければならない。何故なら共同体は力と治安を知ったからである。私はハーシム家の者であろうが、彼ら以外の者達であろうが、そこに居る者に助けを求めよう」。

するとアブドルラハマーンは言った。「神掛けて、この条件を貴方が私に与えるまで、否である」。アリーは言った「神掛けて、私は決してそれを貴方には与えないであろう」。と言うわけで彼は彼の元を去った。そして人々も彼の元から立ち上がり(去った)。

それからアブドルラハマーンはモスクへ出掛けて行き、それから人々を集めて、神を称賛しそして彼(神)を誉め讃えて、そして言った。「正に私は人々の諸事を検討した。だが私は彼等がオスマーンで等しく(意見が一致していると)見てはいないが、嗚呼アリーよ、自分自身の元へ繋がる道を開いてはならない。と言うのは、それは剣(での戦いを意味するから)であり、他の何ものでも無いからである。即ち故イマームである、オマル・ブン・アルハッターブの遺言によって行うものであるからだ」。

そしてこの事に依り、アブドルラハマーン・ブン・アウフ、彼を神が嘉みし給わんことを、彼の勇敢さが明らかになった。つまり状況は差し迫り、事態は重大であつた。そしてこの様な出来事において人々の中の天才達が明らかになるのである。

彼(アルムサウワル・ブン・ムハッラマ) 言った。それから彼(アブドルラハマーン) はオスマーンの手を取って、彼に誓いを立てた。そして人々全員も誓いを立てた。そしてここでオスマーンに誓いを立てると言う問題は終結した。

そして我々は巷間で言われるようになった事を放棄した。恐らく或る者は、汝はオスマーンの歴史に関係している者であり、遺言におけるオマル・ブン・アルハッターブの話に踏み込み、そこからカリフ職について評議会にまで及んだのは、どういうことだ?と言うであろう。

私は、何故ならばオマルのこの行為、それはその本質において偉大な憲法であり、そして大いなる法律であるからだ、と言つたのである。

つまりイマーム職は、その存在の全ての役割や生活において、その側面の全てに関して、彼に集中していたのであり、信者達の長、アルファールク(オマル・ブン・アルハッターブ)に依拠していたのである。彼が設定したその法則を彼(アブドルラハマーン・ブン・アウフ)は採用した。つまりそれはその最初から最後に至るまで正しい根本原理であり、そして満足のいく基盤であり、堅牢な支柱であつたからである。そしてこの様な物の上に社会的機構の構築が立脚しているのである。そしてこの様な物の上に政治的諸状況の安定が立脚

しているのである。

オマルは、真理の人々の誰に対しても、その光が隠されることのない公正さの太陽であった。そしてもし構築が作業の上で進んで行くものであったならば、共同体は時代を通して最も高い地位にいたのである。しかし事態が裁きと運命を人質に取った時に、(P.177) 状況は我々がかつて聞いた様に、そして今聞き、見ている様なものになった。そして兎に角オマルが制定した法律は、彼の後に来る者を能力不足としてしまった。

そしてオマル、神が彼に慈悲を垂れ、そして彼を嘉し給わんことを、彼の如き者は、人々の中の何処にいるのであろうか？

つまりこの椅子は、イマームとしてのオスマーンが座したものであるが、しかし個々の法的解釈を行う者が正解だったのではない。つまりオマルはムスリム達の為に法的解釈を行った。その際彼はその様な苦悩の状況にあった。

アブドゥルラハマーン・ブン・アウフも同様の法的解釈を行った。そしてもし彼に幸運がなければ、法的解釈の後で、咎められることはなかったであろう。そしてここにおいて事態はオスマーンにとって安定したものとなった。そして彼の後継が正しきものとなった。そして彼のイマーム職が確定した。そして彼は彼の業務を行った。

それからオスマーンにとって彼から何が生じたのであろうか？そして彼はそこ（オスマーン）で何をしたのであろうか？オスマーンは、第3代カリフの日々において、は第1代、第2代カリフの日々にあったオスマーン以外の何ものでもなかった。

何故ならばオスマーンの諸事は、オスマーンの王であるアルジュランディーの子孫達の祝福された統治者達の手の中にあり続けていたからである。その民の中には亀裂も偽善も分離もなかった。そして高潔なイスラーム法の裁定がその活躍において普及し、そしてその行く道筋において適用されていた。

オスマーンの心中においてはオスマーンについての懸念は知られていなかった。そして彼の耳には、耳を傾ける声が響くことはなかった。つまり彼はオスマーン以外の諸国に係るように、オスマーンに係ったのである。

それからオスマーンは辺境地の人々の中で彼に抵抗する者達に対して立ち上がり、そしてムスリム達は彼の時代に征服に次ぐ征服を成した。そして何人も否定することの出来ない業績を成し遂げたのである。そして6年が経った時、彼は栄光の空の上において、ムスリム達は彼の周囲において、彼の呼び掛けに応え、そして彼の主張を支持した。

たとえ神が或る民族を選択されることを望まれたとしても、彼等の最善の状況において、そして彼等の特性の完璧さにおいて、試練をお与えになるのである。つまり諸々の出来事が宗教において起こった。それはムスリム達の、そして信者達の中で権力を持つ人々の注意を喚起したのである。そしてとうとう分裂の地獄の業火に火が付いたのであった。そして分裂の議論が起こり、意見が相違し、そして思いが悪化した。

するとムスリム達があらゆる方向から離反した。そして威力に満ち、威厳のある神が義務となされた様に、より公平で、より公正なものを考慮する為に、オスマーンを名指し、権力の座から外し、そして自分達の一族にカリフ職をもたらそうと考えた。(P.178)つまり市井では、失望と有害を（彼等は）呼び掛けていたのであった。

そしてとうとう事態はオスマーンの殺害に至った。状況は限りなく悪化し、果ては、アンサール（マディーナで支援した者）達とムハージル（メッカから移住して来た）達の間で、意見を持ち、衆目に値するムスリム達の誰一人として彼の埋葬において別れを告げなかった。

彼等はその当時豊かな者達であった。オスマーンは来世の館に行き、オスマーンに不平を言うこともなく、オ

マーンも彼に不満はなかった。神を称賛せよ、彼の殺害は、彼の生涯の 80 歳もしくは 88 歳の冒頭であるとも言われた。そして彼のカリフ職は 11 年 11 カ月と 14 日であった。もしくはカリフ職は 12 年とも言われている。もしくは殺害時は 82 歳であるとか、83 歳とか、90 歳、等々ともいわれていた。

彼の殺害はムスリム達の集会でのことであった。彼は包囲されていたが、40 日とも 20 日とも 49 日とも 80 日とも言われている。そして彼の殺害は、水曜午後のことで、彼の埋葬は土曜の午前中であった。またヘジラ暦 35 年ズルヒッジャ月の 18 日が過ぎた金曜日とも言われている。

そして巡礼月の犠牲祭の直後に続く三日間（タシュリーク）の中日に殺害され、そして埋葬されず、礼拝もされない状態で 3 日間経ったとも言われている。そしてジュベイル・ブン・ムトアムが彼に礼拝を捧げ、我々が前述した様に、夜埋葬された、とも言われている。そして高貴な者達は彼の葬儀を見送らなかった。そして我々がこの書の編纂にあつて前述した事で、我々が言った様に、オマーンからの悪しき事を彼（オスマーン）は見ず、オマーンも彼から見ることもなかった。

### アリー・ブン・アビー・ターリブとオマーン

オスマーン・ブン・アッファーンが死亡した時、ムスリム達に政治の潮流が波立った。そしてイスラームにイマーム擁立の必要性を呼び掛ける世論が荒れ狂った。そしてオマル（ブン・アルハッターブ）が見定めた評議会は、イマーム職に数人の男達を推挙した。彼等の中には、アブー・アッスブタインそしてワーリド・アルフスナインがいた。

この人物に関してオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼は次の様に言っていた。嗚呼アリー（ブン・アビー・ターリブ）よ、貴方がそれ（イマーム職）を望まないのであれば、私が貴方を任じるのを私に止め立てするものはない。そしてアブドルラハマーン・ブン・アウフもまた彼（アリー・ブン・アビー・ターリブ）に彼（オマル）が言った事を言った。

アリー・ブン・アビー・ターリブは最初の日から彼がそれ（カリフ職）に一番相応しいと見做していた。

つまりそれ故に彼はアブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼に忠誠を誓うことに依拠した。そしてムスリム達はその事に対して、彼に特別な（意図）があるとは見做していなかった。そして彼は既に、ムハージル達とアンサル達の間でのカリフ職の事案を知っていた。そして彼等の中の誰も、アリー（ブン・アビー・ターリブ）が、それ（カリフ職に関して）優先権がある、とは言わなかったのである。

従つてオマル（ブン・アルハッターブ）はそれ（カリフ職）を評議会にしようとした。そして彼もアリー（ブン・アビー・ターリブ）が他の者よりも、その事案に関してより権利があるとは言わなかったのである。

そして彼（アリー・ブン・アビー・ターリブ）は、一番権利を有していたムスリム達、彼等は彼（神）の大地において神の忠実なる者達であり、そして彼の地における後継者達であつたが、（カリフ職に就任する事を彼らが）放棄した時に、一番権利を有していた。のみならず、アリー・ブン・アビー・ターリブはそれ（カリフ職）に強い野望があつたにもかかわらず、それに推挙された男達の中の一人でしかなかった。

いずれにしても、男達は（共同体の）業務に精通していた。そして個々の者は固有の事柄に相応しかつた。そしてこの事案は未だに人類の諸状況において存在し続けている。一方で真の完全さは、力強く、威厳のある唯一の神に帰着するのである。

つまりアリー・ブン・アビー・ターリブがムスリム達の諸事を担った時に、オマーンは、真理と宗教に従い、信者達の長に追隨するムスリム達の諸王国全ての中の一つであつた。

当時のオマーンの総督は、イバード・ブン・アルジュランディーであり、信者達の長（オマル）側の人物で

あった。彼はオマーンの諸事を執り行い、カリフに服従し、そして彼の命令に耳を傾け、カリフ職の代行者として、(自己への)寛容の無い仕事を行った。

アリー・ブン・アビー・ターリブはと言うと、彼のイマーム職の構築は、狡猾なムアーウィヤ・ブン・アビー・スフヤーンがもたらした事で、直ぐに崩壊してしまった。

即ち彼(ムアーウィヤ)はムスリム達の支配を企てたのであった。彼にはイマーム職への欲があり、可能な限り与えられているもの全てで、それを注視し続けていた。

つまり彼がそれに立候補しても、(イマーム職が)彼の近くにはいないと見做していた時には、それ(イマーム職)を抑圧する事を行い、そしてそれ(イマーム職)において(アリーが)遭遇する事には無頓着で、それ(イマーム職)を見出せる処からは何処でもそれを得ようとしたのであった。

(P.180)それ(イマーム職)がアリー・ブン・アビー・ターリブにもたらされた時に、彼(ムアーウィヤ)は彼の絶望がそれ(イマーム職に)近づいて来て、彼の希望がそこから後退して行くのを見た。

つまり神の運命の中で、アリーは、ムスリム達の諸行為の中の一つの行為でさえ、それがどの様なものであれ、彼を安堵させられないと(ムアーウィヤは)見做していたのである。何故なら彼の状況は、彼が(権力等の)行使と相いれないのであり、そして我々は彼(神)の意思に我々の行為を背けられないのである。

彼(ムアーウィヤ)は彼自身の為に、オスマーンの血のあがないをを求めることを捏造した。そして彼(ムアーウィヤ)は彼(オスマーン)が不正に殺害された、と触れ回った。

そして大シリア地方の人達の中で、この意見を叫んだ。それはアリーが信者達の長となり、この事は彼によって為されたことで、そして誰も彼を支援しなかった、と言うものであった。そして人々は彼(アリー)に対して行動し、そして彼に反目した。そして大シリア地方の人々は、ムアーウィヤに、彼が権力を握った時、従った。彼は既に彼等の考えを捉えていた。そして彼に人々をなびかせることが出来たのであった。

つまり彼はカリフ職ではなく、イマーム職に欺いて就いたのであった。(この事は)大衆に対して、彼が自分の意図の手段とする諸事を吹き込みながらのことであった。つまり彼は人々を、子供を導く様に、彼の背後に隊列を組んでいる駱駝(遠征軍)の方へ導いたのである。(次の様な詩が広まった)

彼は(汝の元に)(ムスリム達の集団と言う)筋肉の裂け目から脛骨を叩きに来た。(その骨には)迷誤(不信心)において、野望と無謀からなる2つの角がある。

大シリア地方で、彼は子供を亡くした女人の様に、人々にオスマーンのシャツを広めながら、夜明けの葉の(天露)様に号泣する。

つまりそれはアリーを忙殺し、彼はそれに専念した。そして彼の手中にあった手綱が混乱した。そして安定を捕まえられなかった。それから動乱がその温床から彼に向い発生した。彼の元にあった火花がその火力を強め燃え上がった。そしてその事は、イスラームの諸王国との連絡を彼に制限してしまう事となった。

そして宗教の砦から彼を遠ざけることになった。つまりアリーにとって、オマーンでは統率の効かない行為はなかったのであるが、それは神が彼に対して、アブドルラハマーン・ブン・ムルジム・アルムラーディー・アルミスリーの手によって、(殺害と言う)運命を定めるまでのことであった。オマーンは同胞のムスリム達の手によって連続して殺害された3人のこれらのカリフ達の殺害とは無縁であった。その通り。正にオマル・ブン・アルハッターブを殺害した男は、正確にはムスリムではなかった。

そしてアリー・ブン・アビー・ターリブの死によって、正しいカリフ職の体制が崩壊した。そしてそれ(カ

リフ職)は舐まれていく王権に変わった。

アリー・ブン・アビー・ターリブの殺害は、ヘジラ暦40年ラマダーン月17日金曜日の夜のことであった。そして彼はその2日後に亡くなった。

(P.181)カマルッディーン・ムハンマド・ブン・ムーサー・アッドウマイリーが言った。「57歳で亡くなった。または58歳とも言われている。そして63歳とも68歳とも言われている。そして彼の年齢は65歳であった。

イブン・ジャリール・アッタブリーはそれに関して言った。「63歳であった、と言われている。それは神の使徒の年齢であり、アブー・バクルやオマルの年齢でもあった。

そして彼のイマーム職の期間は4年9か月と1日であった。彼はその全ての日々を、宗教を引き裂き、ムスリム達全てを分裂させる危機の中で過ごした。そしてアリー・ブン・アビー・ターリブは彼のカリフ職の支柱を確立出来なかった。つまり彼の声は国境を越えることはなかった。そして彼は、日々が彼の手中に服従し、そして日々が彼の強要の下にあることを望んでいた。

アリー・ブン・アビー・ターリブは、我々が述べた様に、殺害された時に、イスラーム王国は、その壁が崩壊するに至るまで、その根幹が揺らいでいた。そして地球の諸地域における共同体は、困惑と恐怖と驚愕の状態にあった。人々は彼等の行く末が分からなかった。

つまりアリー・ブン・アビー・ターリブの殺害以来、イスラーム国家は、たとえそれが奇妙なことでなかったとしても、カリフ達の殺害を予期していたのである。しかしそれ(殺害)は不安と恐怖を引き起こした。そしてこの現世の段階において、懸念を倍増する事と呼び掛けたのであった。

既に(アリーの息子)ハサン・ブン・アリーは、彼の力量を鑑みて、彼の父の死後、忠誠を誓われていた。何故ならば彼は聖戦を執り行うハーシム家の禁欲的な知識人であったカリフであるアリー・ブン・アビー・ターリブの息子であったからである。そして彼の母は、世界の女性達の主人であるファータィマ・アッザハラーであった。

そして彼は最も包括的な人物であった。そして既に彼にはイマーム職において求められている修飾詞が豊富であった。彼は、イブン・ムルジムによる殺害に関する彼の父の遺言に彼が背反すると言うことで、不名誉な事は語らなかった。何故ならば彼(アリー)は人々に対して、それを真似ない様に忠告し、人々もそれに倣ったのであった。

恐らくアルハサンにとっては、その模倣は彼の命令でもなく、彼が満足するものでもなかったのである。そして彼は彼の立ち位置に相応しい者であった。しかしアルハサンはムアーウィーア(ブン・アビー・スフヤーン)の屠殺にイマーム職を投げ入れたのであった。

彼はムアーウィーアが正当なイマーム職の資格者ではなく、そしてこの投げ入れが、イマームであったアリーの息子の気高きアルハサンに相応しくないと知っていたのであった。それのみならず真理の勝利とその支持において血の海に突入する事が相応しい事であった。

つまりイスラームの律法におけるカリフ職は(P.182)正しい道を示す遊戯でも戦利品でもなかったのである。そしてそれに対して報酬を得られるものでもないのである。特にムアーウィーアがアルハサンに対して彼が約束した事を履行していない状況下においては。

そして彼に毒が盛られ、ついには毒により死んでしまった事が明らかになると、天はムアーウィーアにとって澄み切ってしまったものとなった。

我々にとって重要な事は、アルハサンはオマーンにおいて如何なる活動もしていなかった、ということであ

る。また同様に、彼は他のイスラームの諸国においても同じ様に如何なる活動もしていない。そして正にムアーウィーア（ブン・アビー・スフヤーン）に対しての行動だけがあったのである。

つまりムスリム達の主であり、信者達の長とは、人々が満足するか、もしくは嫌うかなのである。つまり刀には、個々の人達が（現在に至るまで）未だに知っている様に統治があるのである。そして正に言わんとする事は、共同体に対する王権と統治なのである。そして既にアルフセインは、カイス・ブン・サアド・ブン・イバーダの殺害後、ラビーウ・アルアウワル月の残り 5 日にムアーウィーアに諸事を譲り渡したのであった。

つまり彼のカリフ職は6カ月に5日足りないものであった。彼に関しては言及に値する事は起こらなかった。そして彼はそれ（カリフ職）に就任した後、それに安らぎを見出した。

そしてムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンは、白歯で王権に噛み付く王としてムスリム達の中で立ち上がった。と言う訳で我々は、彼とムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンとの間にあった関係について言及する事を続けたのである。つまり我々の言葉は、以前にも我々に起こった様に、その事で完結するのである。

そしてムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンが王座に就き、彼にとって天が澄み渡った時に、彼はアリー・ブン・アビー・ターリブと彼の子供アルハサンの後には、誰も恐れなくなった。

そして諸事は彼の元に服従し遜って来たのを見た。そしてオマーンの諸事は当時イバード・ブン・アルジュランディーに帰していた。そしてムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンは彼に対して（権力の）伸張の望みを持たなかった。

そうではなく、彼は彼の手からの大シリア地方の離脱を恐れていた。ムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンは大シリア地方で過ごしたのは 20 年に亘った。そしてその期間は効果的な影響があった。つまり彼の元での究極の目標は、彼にとって生じた状況に満足する事であった。そして大シリア地方、イラク、エジプトにおける彼の指導権の支援を確立したのである。そしてこれらがイスラームの王国の母体であった。

と言うのは、エジプトはアムル・ブン・アルアースの分け前であった。イラクと大シリア地方が残っていた。大シリア地方とは言えば、それは彼の影響下にあり、一方イラクは彼の支配の元にあった。

そして彼にはこれらの王国の外に対する見解はなかった。つまり彼はオマーンにおいて胎動させることも屯田させることもなく、彼の生涯に亘り、如何なる権力もなかったのである。

そしてとうとう神が彼に裁定を下した（死去した。）その折オマーンはその人々の手中にあり、イバード・ブン・アブドがその首長であった。

ムアーウィーア・ブン・アビー・スフヤーンの死去は(P.183)ラジャブ月初めであった。そして（ヘジラ暦）60年のラジャブ月中旬であった、とも言われている。彼の歳は 80 歳であった。そして 85 歳とも 75 歳とも言われている。また 88 歳とも 90 歳とも言われていた。彼は首長としてカリフとして 40 年生きた。そして神は彼からオマーンとその人々を守った。彼等から彼を守った。彼（神）には歴史学者達が言及した大いなる力と意志があった。

そしてこの様に時は甘美にそして過ぎて行く。そしてそれは消え去る影以外の何ものでもない。行き着く先は真の支配者である神の御許なのである。（2016/10/6,P.183 まで）